

CONTENTS

1 Interview この人にきく

2・3 私の提言「途上国と子どもと学校」

4・5 テーマエッセイ / 「人のつながり」

6 JICE NEWS / 多士彩才

Watanabe
Interview
この人にきく Shinichi

渡辺 慎一さん

国際大学副学長

広い視野と問題意識をもった
人材の育成が、私の役目です

印象に残る日本の思い出に、JICEのスタッフの支えと励ましを挙げる卒業生は少なくありません

日本で学ぶことの意味

私は留学生支援無償事業(JDS事業)に立ち上げ当初から関わっていますが、これにはベトナムでの調査研究をとおして開発途上国での人材育成の必要性を痛感したことが大きく関係しているのです。通貨危機の影響を受けたアジア各国の経験を目のあたりにして、金融をはじめ一国の政策形成には理論的なバックグラウンドを持った人材の育成が重要だと実感しました。また、国造りには各国の国際協力の輪の中で考える相対的な視点が必要です。日本や他国の経験を比較しながら開発の問題や方法を学べる環境にある日本への留学は、とても意味があると思います。

常に広い視野で問題意識を持つようにすると、予想もしなかった貴重な発見をすることがあります。私の体験ですが、詩人・茨木のり子さんの「水の星」という詩をご存知ですか。「宇宙の漆黒の闇のなかで ひっそり回る水の星(略)それなのに私たちはぼんやりしている」。問題の存在に気付いていないことの重要性を説く点で、ブルントラント報告書^(注)の問題提起と同じことを言っているのです。この偶然には本当に驚きました。

卒業生の将来に期待

日本では、戦後復興・経済成長の陰で60年代の終わりから環境問題や社会文化の見直しなど社会問題が顕在化しました。また石油ショックや東南アジアでの反日デモなどを経て、日本の経済発展と国際社会との関わりも認識されました。異なる文化や価値観を理解し相手国の経済発展に貢献する人材の育成の場、日本が抱える社会的課題の調査と解決策を探る場所として、昭和57年に設立されたのが国際大学です。

国際大学ではJDS留学生を事業開始2年目から受け入れており、現在は72名が学んでいます。JDS卒業生は、日本留学の経験を活かし政府機関で国際開発に携わる人、新聞記者など民間企業に勤務する人、人的ネットワークを活かし草の根レベルで祖国と日本の橋渡し役になり活動する人などさまざまです。将来は、祖国のリーダーとして活躍する人材が出てくると思いますね。

(注)「Our Common Future」(ブルントラント委員会報告書、1987年) 環境問題を開発途上国の経済開発、社会経済開発との関連でとらえて提起し、京都議定書の発効へとつながった。

わたなべ しんいち 昭和22年山梨県生まれ。都立大学経済学部卒業後、一橋大学経済学研究科大学院修士課程、昭和58年ミネソタ大学博士課程修了、Ph.D.取得。平成7年～13年JICA専門家としてベトナムで調査研究。平成6年より国際大学大学院国際関係学研究科教授、平成17年より現職。国際平和学プログラム主任、国際経営学研究科長兼任。JICEとは平成12年度に開始されたJDS事業の立ち上げ段階から関わりがある。

私の提言 途上国と子どもと学校

ケニアの小さい学校

ケニアの遊牧民であるマサイの地域での学校の意味は何か。落第や中途退学の多い学校は効率が悪いといわれるが、マサイの子どもにとっては大切な場なのである。たとえ短期間であっても、学校での学びによって世界共通の知が子どもの心に結晶化し、子どもたちの人生に決定的な影響を与えるのである。

内海 成治 (大阪大学大学院教授)

草原に建つ「2本の木」

ケニアの首都ナイロビから西に車で2時間ほどのところにナロック県スワ村がある。あたりは大いなる草原(リフトバレー)の草原であり、すぐ南にスワ火山がゆつたりとそびえている。国立公園でもないのにたくさんのキリン、シマウマ、ガゼルを見る事ができる。スワ村から15分ほど車を走らせると右手奥に2本のアカシアの大きな木が並んで立っている。目印のない草原では珍しくはつきりと場所が分かる。その木に寄り添うように小さい学校がある。それがイルキーク・アーレ小学校である。イルキーク・アーレとはマサイの言葉で「2本の木」の意味である。

小さい学校

この小学校は3年生までの小さい学校である。ケニアの教育制度は8・4制で小学校は通常8年であるから、こうした学校は不完全学校と呼ばれている。校長先生が言うには、イルキーク・アーレ校の周囲には3つの8年制の小学校があり、4年生からはそうした学校に行くことになっているので、分校といってもいいのかも知

れない。

1年から3年まで合計35名、保育クラス21名、教師は校長を含めて4名である。子どもたちは、数キロの草原を歩いて来る。教科書や教材は無償化政策によって十分ながら学校が用意してくれる。しかし、ノートと鉛筆を揃えてユニフォームは買わなくてはならない。この学校ではユニフォームを買えない親が多い。

小学校での重要な科目は国語(スワヒリ語と英語)と算数、社会と理科であるが、宗教(キリスト教)も教えられる。

ケニアの先生の教え方はとても厳しい。例えば、学校では公用語のスワヒリ語と英語で教えるためにマサイ語の使用は禁止されており、上級生ではマサイ語を使用すると鞭で打たれるのである。小さい子どもたちにとって2つの言葉を学ぶことは大変である。しかし、学ばなければ進級も困難なために体罰が怖いからではなく、本当に必死である。

日々の暮らしが学校が

私は大学の研究室の学生たちとともに、昨年(平成17年)と今年(平成18年)、イルキーク・アーレ校の生徒一人ひとりにインタビュー

大草原の2本の木と学校



肩を寄せ合っての勉強

ーを行い、その家庭を訪問した。こうした小さい学校に対して、子どもや親がどういう期待を持っているのか、こうした学校の存在理由を探るための調査である。校長先生が言うようにこの学校が、8年制の学校に行くための分校としてはうまく機能していないようだ。親たちは子どもがマサイの社会で生きるにしても、近くの学校に短期間でもよいかから通わせているようである。

昨年の調査では3年生は11名で、男子9名、女子2名であった。校長先生の話が本当であれば、今年はその子どもは近くの学校に進学しているはずである。調べてみると3名の男の子が近くの小学校に進学したが、女の子2名を含む8名が落第して今年も3年生であった。落第の理由は成績不振や長期欠席など学校が落第させる場合と

親が別の学校に行かせたくないあるいは進学に必要なユニフォームを買えないなどの理由で落第させられる場合がある。成績不振の原因は長期欠席であるが、その理由は男の子も女の子も家の仕事の手伝いである。小学校低学年の子どもであつても家ではとても忙しい。男の子は羊やヤギの世話、女の子は水汲み、料理、洗濯、畑仕事である。

ある女の子は親が離婚したため祖母と暮らしており、家事一切を行っているために欠席が多く落第してしまつた。多くの生徒は落第を繰り返して、やがて家に帰るのである。たとえ近くの小学校に通学できたとしても、その上の学校に行くことなくマサイの生活に戻るであつた。

進学したとされる3名の男子生徒の様子を見るために家庭訪問をした。3名とも、マサイの服を着て羊やヤギの世話をしており、学校には行ってないという。理由は新しい小学校に行くために必要なユニフォームを買えないからとのことであつた。

小さい学校の存在意義

イルキーク・アーレ校のような学校の意味は何だろうか。これま

での学校評価や教育協力の文脈からは、落第が多く効率の悪い学校として切り捨てられてしまつた不完全学校である。しかし、学校や家で子どもたちと話をするなかで感じたのは、こうした学校だからこそ、いやこうした学校だからこそ意味があるのだ、との思いである。小学校を終えることなく遊牧の生活に入り、男の子はマサイの戦士になり、女の子は結婚して妻となる。しかし、この子らの精神は、教育を受けることなかつた親の世代とは非常に違つている。短期間でしかなく、また、不完全な学びかもしれないが、子どもたちは世界の共通の知を獲得しているのである。言葉、計算や合理的なものの考え方が子どもたちの心に結晶化しているのである。

遊牧をベースにした伝統的な社会のなかでマサイの一員として生きていくための社会性を身につけることは大切である。しかし、その一方で、たとえ不十分とは言え、子どもたちが学校という学びの場を持つことはとても重要なことだと思ふ。そして、これは近代公教育の原点であり、効率の名のもとに切り捨てることのできない大切な場なのである。

うつみ せいじ

昭和21年東京生まれ。京都大学農学部および教育学部卒業。JICA専門家(マレーシア)、国際協力専門員を経て平成8年から現職。専門は国際教育協力論。著書として『国際協力論を学ぶ人のために』(世界思想社)、『国際教育協力論』(世界思想社)など。





”人つながり”って何だろう?

お茶が伝えた少数民族の心

おもてなしから生まれる関係

磯淵 猛 (エッセイスト)



雲 南省西双版纳(シーサンパンナ)、中国の西の果てのこの地は、すぐ隣にミャンマー、そしてインドのアッサムと続き、中国離れたエキゾチックな空気が流れている。それもそのはず、バナナやパイナップル、バナナアップルはもちろん、ジャングルが続き、象も見かけるのだから別世界である。

私がこの西双版纳を最初に訪れたのは平成15年、そして二度目は平成16年のことだった。初回はこの地が茶の発祥地と言われ、1700年も生き続けているという茶の古樹(茶樹王)を調査するために、その折に、この地に伝わる竹筒茶を飲ませてもらったのが、ジノ族の切資さんである。ジノ族はもともと八二族と混同されていたが、昭和54年に2万人弱が基礎ジノ区を定め独立した民族である。茶の文化については八二族から引き継がれたもので、竹筒茶も、700年なのか800年なのか、ジノ族の伝統としてその独特な飲み方が継承されてきた。

翌年、私はこの茶を紹介するために16名ほどのお茶好きな人たちを引き連れて再度切資さんを訪ねた。切資さんは5、60戸ほどの小さな村に住んでいて、年齢は47歳、身長は160センチほどのやせ型、細い

目がやや垂れ下がっていて温厚な優しい顔立ちである。

村に入るとあちこちにバナナの木があり、ジャックフルーツやパイナップルの木もある。見事に熟したパイナップルに、みんなが立ち止まって物欲しそうに顔を覗き込んでいるので、切資さんが不思議そうに聞いた。

「パイナップルが好きなのか。ここでは人間は食べなくて、豚しか喜ばない」「ウソー」

としか言いようがない。インドもスリランカも日本でもパイナップルは絶品とされている。所変われば価値観もまったく異なる。

切資さんの家は薄暗い土間が居間と台所になっている。2階もあってそこは寝室とのことだ。家には奥さんと3歳の孫娘がいた。そして、今日はみんなに昼食を用意してくれるという。確かに昼近くになっていたが、そんな予定はない。竹筒茶の飲み方だけ見学したいのだ。誰よりも困惑したのは旅行者であった。衛生面や食の安全性を考えると、できれば断りたい。万一にも事故があつてはいけない。しか

ような煮物もあり、雲南の米で炊かれたごはんも用意されている。

「うまい、おいしい、うれしい」
なんとこの言葉が。ここにずっと住んでいたような気になさる。

食事が終わり、いよいよ竹筒茶。さつき摘んだ茶葉をバナナの葉で包んで火にくべて蒸し焼きにする。節と節との間が6、7センチもある雲南の青竹を斜めに切り、先ほどの茶葉を竹筒に入れ、豚も鶏も、犬も一緒に飲んでいる流れ水に注いで火にくべた。待つこと30分、ちよつとお茶を飲むのにこんな

手間と時間をかけている。しかし、誰一人として、遅いとか、早くしてという者はない。

やがて竹筒から沸いたお茶が、少し汚れたコップに注がれた。黄色い水色(スィシヨク)。恐る恐る口をつけてみる。甘い、なんと優しい味なのか。みんなの歓声に切資さんが細い目をもっと細め、ゆつくり煙草に火を付けた。

最初に切資さんに会った時、この竹筒茶を他の人に見せて欲しいとお願ひしていた。しかし、本当にこんなところに大勢の外国人が訪ねてくるとは思わなかったに違いない。竹筒茶だけではとても十分なもてなしとは思えず、奥さんと相談して昼食を用意してくれたのだらう。

ここにきて4時間も経っている。でもお腹もいっぱい、言葉も通じないのに気持ちも胸もいっぱいになった。初めて会ったのに別れが悲しい。どうしてか、みんなの目に涙がいつぱい浮かんでいる。汚いと思っていたコップを両手で大事そうに撫でてくれる人もいる。

切資さんは、今日の仕事は終わった、という顔をしながら煙草を吸い、孫娘を抱き上げた。この地に生きる茶樹王の恵みである。



近所の村人も集まって。中央がおしゃれをした孫娘と切資さん



古樹茶から茶摘みをするジノ族の切資さん

し、台所では火が起り、何やらもう出来つつある。切資さんは一向にかまわず、茶を摘みに行こうと動めてくれた。村の山の急な斜面に案内され、2、3メートルにも伸びた樹齢1000年から2000年の古樹から新葉を摘むのである。みんな初めての体験で、こんな自然のままの茶の木など見たこともない。枝を曲げたり、木に登ったり、まるで果物を採るように茶葉を摘んだ。1時間ほどして切資さんの布袋に半分ほどになり戻ることになった。確かにみんな腹ペこである。のども乾いている。これから街まで帰るのに2時間はかかる。竹筒茶を飲んでいると昼食は夕方になりかねない。

土間に入るともうみんなの決意は固まっていた。一つしかないかまどで奥さんがせつせと料理をつくっていたからだ。大きな鉄鍋で鶏肉が炒められ、ぶつ切った青菜が入れられている。料理の湯気と煙、そして木の燃える音と匂い、外ではこの匂いに興奮しているのか黒豚が騒ぎ、犬が走り回っている。

奥さんの心尽くしの料理は大きな井に3つに分けられ、土間の低い机に並べられた。その他にもいつの間にか作ったのか、鍋の中には野菜汁と肉じゃがの

いそぶち たけし

昭和26年愛媛県生まれ。青山学院大学卒業後、商社勤務を経て、昭和54年紅茶専門店ディンブラ開業。紅茶の輸入、レシピ開発、技術指導、企画アドバイザーを行う。紅茶研究家、エッセイストとして著書多数。主著に『紅茶事典』(新星出版)『一杯の紅茶の世界史』(文春新書)など。



テーマエッセイ「人つながり」って何だろう?とは

さまざまな分野で活躍する方に、1つのテーマやキーワードから「人つながり」を語っていただく企画です。

JICEが目指す人と人とのつながりをあらためて考えるきっかけにしています。



上)竹筒茶。生の茶葉をバナナの葉で包み蒸し焼きにした後、斜めに切った青竹に入れて沸かす
右)昼食を作ってくれた切資さんの奥さん。出来たての竹筒茶を淹れてくれた





人と人をつないで支えます国際協力



JICEには、多彩な専門分野をもつスタッフが、人と人をつなぐ架け橋として活躍しています。個性豊かな横顔を紹介していきます。

コミュニケーションの第一歩は言葉から。 日本が好きになるきっかけづくりを目指しています。

日本語指導員 本多 敏子さん



生き生きと研修を受ける研修員の姿を見るのは一番嬉しい瞬間であり、やりがいのある仕事だと実感します

JICEでは、JICAの技術研修で受け入れた研修員を対象に、日本の技術や知識の背景にある文化や価値観を教えることで研修の効果を高め、日本への理解を深めることを目的とした日本語研修を行っています。私は「技術研修のための日本語」に興味を持ちJICEの日本語指導員となり、職業訓練、看護などさまざまな研修の日本語講習や教材作成を担当しました。

日本語指導員の仕事は、知識はもちろん現場での経験の蓄積が大切です。多様な背景を持つ研修員の文化や習慣を理解し配慮することも必要ですし、一人ひとりの反応を見ながらクラスをまとめていくことも求められます。研修員は日本語を大変楽しんで学び、その後研修に入っていきます。

日本語研修の成果を海外で実感することも多いです。中国、インドネシアにJICAの日本語専門家として派遣された際、帰国後も日本語の勉強を続け、日本が大好きという研修員に会いました。彼らが周囲に発信する力は大きいと思います。私自身も現地への理解を深めることができた貴重な経験でした。

現在は、JICA以外の受託先の日本語講習を担当しています。指導員になって20年以上になりますが、日々新たな課題が生まれ、一つひとつクリアしていく苦労と喜びを同時に楽しんでいます。私の仕事は、単に言葉を教えるだけでなく、人と人をつなぐ、最終的には国と国をつなぐ人材育成の一環を日本語の授業を通じて担うことだと思っています

JICE NEWS

平成18年度第1回評議員会および理事会を開催

6月16日、JICE本部内会議室において平成18年度第1回評議員会および理事会が開催されました。今回は、平成17年度事業報告・収支決算、評議員会副会長の互選、評議員の選任について審議が行われ、すべての議案が承認されました。なお、本年4月から7月までの役員および評議員の異動については、下記「役員・評議員の異動」のとおりです。

第5回ラオス海外高校生エッセイコンテスト 特選受賞者を対象に日本での研修を実施

3月に実施した第5回ラオス高校生エッセイコンテストで特選を受賞したラオス高校生5名を、6月下旬から11日間の日程で日本に招へいしました。東京と広島への視察プログラムの後、ラオス高校生はメインとなる日本の高校生との交流プログラムで高知を訪れました。高知商業高校での授業参加やホームステイを通じてラオスと日本双方の理解と交流がはかられました。

韓国国際交流推進協会理事長が訪日 パートナーシップの促進を確認

4月11日から15日までの5日間、韓国国際交流推進協会(INEPA)の朴理事長が日本を訪問しました。本邦滞在中、JICA本部を訪れ、理事への表敬訪問や関係各部の幹部との意見交換を行いました。朴理事長からは「INEPAも韓国国際協力団(KOICA)との関係においてJICEとJICAと同様の関係の構築を目指したい。そのためにJICEの知識・経験を一層習得したい」との発言がありました。昨年度より続いているJICEとINEPAのパートナーシップがJICAとKOICAのパートナーシップにも良い影響を与え、また、日韓の友好関係の促進にも貢献するとの認識を共に深めました。



朴INEPA理事長(左)の表敬を受ける識評理事長。右側は研修担当の崔チームマネージャー

「この星のアルバムつくりませんか」 JICA第27回国際協力 フォトコンテスト作品募集中!!

写真を通して開発途上国や国際協力への関心と理解を深めてもらうことを目的に、開発途上国の人々の生活文化、自然を撮影した写真や国際協力の現場を紹介する写真を募集しています。詳しくはコンテスト事務局に募集チラシをご請求いただくか、JICAホームページをご覧ください。
【コンテスト事務局】JICE開発業務部内 Tel:03-5322-2546 e-mail:photo27@jice.org
【JICAホームページ】<http://www.jica.go.jp/classroom/>

役員・評議員の異動

(平成18年4月1日～平成18年7月20日)

(5月25日付) 退任 評議員 肥田 理
(6月16日付) 就任 評議員 吉村 忠彦
(6月30日付) 退任 監事 安中 俊夫

JICE は平成19年3月25日に設立30周年を迎えます

皆さまの声を聞かせください

広報紙『JICE』に対するご意見、ご感想、ご質問、今後取り上げてほしいテーマや人物などを、下記アドレスへメールでお寄せください。
広報紙『JICE』編集事務局 e-mail: kohoshi-jice@jice.org



古紙配合率100%再生紙を使用しています

平成18年7月20日発行 編集発行人: 木下 達 発行所: 財団法人日本国際協力センター(ジャイス)
〒160-0023 東京都新宿区西新宿6丁目10番1号 日土地西新宿ビル20・21階 TEL.03-5322-2500 FAX.03-5322-2520 <http://sv2.jice.org>

私たちJICEは、個人情報保護法を遵守し、徹底した個人情報の管理をいたします。